学生の元気は
日本の元気

Ⅲ　リーダーは語る

学生オリエンテーリング復活に向けて

小野盛光

全員で高校生以下の発掘・育成を

日本学生オリエンテーリング連盟
理事長　上田泰正

これまで、オリエンテーリングの競技人口の増加に、日本学生オリエンテーリング連盟（以下日本学連）は大きな貢献をしてきた。ところが、日本学連の登録加盟員数も日本学生オリエンテーリング選手権大会（以下インカレ）の参加者も減少の一途を辿っている。

そしてなによりも深刻なのは、加盟校の減少である。クラブ員が居なくなり、事実上の廃部となり、結果として日本学連への加盟が取りやめとなってしまう学校が続出していることである。現在、大阪より西には加盟校が存在していない。大学クラブの特徴として、クラブ員の勧誘は現役学生が居ない限り実施不可能であり、クラブ員が居なくなった学校が復活するのは、相当困難である。オリエンテーリングに限らず、大学生がクラブ活動そのものをやらなくなってきたことが加盟員減少の大きな原因の一つと言われて久しいが、それだけでは無いと考えている。

日本学連の加盟員を増やし、インカレの参加者をもう一度増加方向に変化させるためには、一度原点に戻って考えることが必要であろう。かつて各学校にオリエンテーリングクラブが設立されていった背景には、入学前からオリエンテーリングを楽しんでいた若者が、色々な大学に入学しクラブを作っていったことがある。そして、もう一つ重要なことは、例えクラブが存在していなくても、大学生が個人でオリエンテーリングを楽しむことができる環境があったということである。個人の集まりがクラブへと進化していった例も多数あった。

今でも高校のオリエンテーリングクラブはあるし、個人の大会も開かれているが、全体として何故うまくいっていないのかを考えた場合、学生クラブ自身の問題とオリエンテーリング界全体の問題が見えてくる。

学生自身の問題として指摘されるのは、オリエンテーリングという競技とクラブの運営に真面目に取り組んできたクラブは、きちんと生き残っていることである。どこかに油断、手抜きなど、ある意味の不真面目さがあった場合に、立ち直ることができなかったのであろう。加えて対抗戦など内輪の行事が増えたことも原因の一つと考えている。内輪の行事は結果として他大学、個人として楽しみたい学生を排除してしまうからである。

一方、オリエンテーリング全体の問題としては、一般大会の減少が言えるだろう。近年公園でのオリエンテーリング大会が増加しているが、一般の公園来場者へのＰＲや家族連れでの参加のしやすさはあるものの、リレー大会も含めてだが、個人で自然の中でスポーツ楽しみたいという人を排除してしまい、そのことが、ボディブローのように利いてきているのではないだろうか。また、ＪＯＡや行政による一般向け広報の不足が、新たな競技者の獲得を阻害していることもある。先に述べたように学生、日本学連としては、内部での努力にほぼ限られるので、一般の力を借りなくてはならない。

これらを考え合わせると、日本学連、とりわけ加盟校自身が、高校生以下のオリエンティアを増やすための活動、一般向けの大会の開催、ＪＯＡ・県協会・地域クラブが実施する様々な活動に積極的に関与していく必要があるだろう。

（上田泰正）

学内でのステイタスアップ

椙山女学園コーチ　　安斎秀樹

東北大時代の安斎氏

読者や周りの人が求める、学生はオリエンテーリング界を支えていく人材、と言う視点では、学生の部活動離れを捉えきれないと思っています。コーチをやっていると言っても競技の指導はほとんどしたことがないです。

また、学生は私が伝えたいことを理解するのにはかなり時間を要しています。

― 最近の新人たちのオリエンテーリングの知識はどうでしょうか。

新入生のほとんどはオリエンテーリング競技に理解があるわけではなく、学生生活を有意義に送るための手段の一つとして部を選んでいます。

椙山女学園大を見ていて感じることは、部員が定着していくためには、オリエンテーリングの魅力よりも、先輩たちに先輩としての魅力を感じることが大切で、後輩たちは部の雰囲気を好きになっていくということです。

―新人たちにはどのような手順やどのような点に力をいれて指導を進めていますか。

学生に対して競技の指導自体をしたことがないのでよく分かりません。

新人には、先輩が楽しんで競技をしている姿を見せることが一番大切です。上級生に対して、自分たちが取り組んでいることは誇りを持てることだということを伝えるようにしています。

若い世代は正当な評価を受けた経験が少ないです。スポーツは結果で評価されると考えていることが少なくありません。

でも、結果で評価するのは他人であって、自分を評価する指標を自分で持たなくてはならない場面も出てきます。上級生にそのような助言をすることで上級生は自信を持って活動するようになります。その姿こそが、下級生にとって必要だと思います。

― やる気は大変重要な競技力向上の鍵だと思いますが、どのようにして上げていますか。

部員の大部分はインカレでエリートを走れるわけではなく、競技で活躍できる人は僅かです。

体育会の部と言ってもアスリートのクラブではなくて、大学の部活動であることが大前提なので、部員全員が団結して活動していくことが一番大事です。

部は全ての部員にとって成長の場でなければなりません。インカレは教育

的にも最も重要な場だと考えています。
インカレでみんなが楽しく感じて、感動して、仲間同士でメッセージを送りあうためにはリレーの選手権で活躍することが最も簡単な方法です。
私が重要だと思っているのは、大学内でのオリエンテーリング部のステイタスを上げることです。それには体育会としての結果を出していくことが必要でした。
インカレで成績を残すことで大学に対してアピールできるようになります。ほとんどの部員がスポーツの経験がなかったり、競技で上位を争う経験をしたことがありません。それでも、部員みんなで前向きな取り組みを続けていくと、自分が上達していくことを楽しいと感じるようになってくれます。
現在の学生オリエンテーリング界は取り組んだことが結果に出やすいので、運良く成績が伴うようになってきました。
それから、椙山女学園大については、学祭に模擬店を出店していることも大きな意味があると思っています。
毎年、たこ焼き屋にできる行列を皆さんにも見てもらいたいくらいです。もうひとつ、部活動として大学に認められるには、部員が大学内で、模範的な学生となってくれることが一番です。ですから、私は学生には「たこ焼きは妥協せずにしっかり作りなさい」ということと「勉強しなさい」とだけ言っています。

― 個々の弱点克服のためにどのような努力をさせていますか。

努力をさせたことはないです。弱点を指摘したこともないつもりです。長所を指摘して生かすように言うことはあります。

― 学生オリエンテーリング復活の鍵は？

例えば、学生にとって魅力的な目標の一つにジュニア世界選手権がありますが、日程が大学の試験と重なるから、代表になっても行けないという人がいるのです。大学の先生はプロの教育者なので、自分の教え子がジュニア世界選手権の日本代表になったら喜ばない人はほとんどいないはずです。
自分が真摯に授業を受けているという自信があれば、先生に相談に行くことができるはずです。
毎年毎年、オリエンテーリング部から代表を出していれば、大学だって対応を変えてくれます。
もしも面倒だからと言う理由で、先生に相談に行くことをためらうとすると、自分の可能性だけではなく、これから先の後輩たちの選択の幅も狭めてしまうことになるのです。
今の名古屋大・椙山女学園大は、勇気ある先輩たちの継続的な取り組みのおかげで、学内で認められる存在になりました。全学の同窓会会報で記事になったり、大学のホームページで紹介されたり、予算審議で取り上げられたりしているそうです。
でも、長い時間かけて作り上げた基礎を崩してしまうことは簡単です。大変だからとか効果が小さいからという理由で活動の幅を狭めてしまうと、自分たちは良くても先輩たちに失礼だし、まだ見ぬ後輩たちにも肩身の狭い思いをさせることになるのです。

大学生のほとんどは自分のことで精一杯でしょう。同期に気を配れても、年代・世代を越えてコミュニケーションをとることは苦手です。先輩が後輩に自然に思いを伝えていける環境が少なくなっている気がします。継続的な取り組みの必要性を伝えられる卒業生・社会人のサポートが必要かもしれません。

（安斎秀樹）

重要な先輩の背中

松澤俊行

東北大時代の松澤氏

―現在努力している大学クラブはどんな点に重点を置いて活動をしていますか。

「スポーツ組織・競技者集団としての自覚を持つクラブ」、「目標が明確で、活動計画と実態が伴っているクラブ」が成功し、活況を呈していると考えます。学生クラブの競技面での目標と言えば、まず思い当たるのがインカレです。インカレも秋（ロング）と春（ミドル＆リレー）の２回開催されており、さらに近年は「同格」の全日本スプリント学生の部も加わりました。合間にはそのための地区選考会もあります。こうしたスケジュールが確立されているので、競技者からすれば節目を押さえた計画がしやすく、活動の柱とする上では最適です。
とはいえ、「インカレで○位を目指す」という簡潔で魅力的な目標も、ひとまず唱えただけで安心してしまい、現状評価も突き詰めてなされず、達成までの過程も明確にイメージされていないとしたら、「聞こえの良いお題目」の域を出ません。そして、その域のクラブが決して少なくない、というのが現状だと思います。達成までにどのぐらい距離があるか、具体的にどのぐらいのことをどのような手順ですればその距離を縮められるか、それらを行うためにはどのようなクラブ行事や役割分担が必要か…。そうしたことを組織的に、具体的に、継続的に考えている、ある意味当たり前のことをしているクラブが抜け出すことに成功し、「有力クラブ」「強豪クラブ」の地位を確立しているように感じます。

―停滞しているクラブを活性化させるにはどんなことするのがよいと考えますか。

学生クラブへの在籍は、誰もが限られた期間となりますから、その期間にたまたま出会う先輩の影響は大きなものとなります。後輩が当たり前のことをしようとするか否か、実際にできるか否かは、先輩次第です。先輩さえしっかりしていれば、後輩は「良き伝統」を引き継いでくれます。一方で、先輩が不甲斐なければ後輩も「悪しき因習」を引き摺ります。しかも、それを悪しきものと自覚できないままに、です。かくして強豪は強豪であり続け、そうでないクラブはそうでないクラブであり続けるのでしょう。
もしも「そうでないクラブ」のある部員が、何かのきっかけで「どうもこのクラブの活動は不足しているのではないか」と自覚できたとしたら、かつての先輩を敵に回してでも悪しき因習を打破して欲しいと思います。そういう気概を持った部員が、たとえ一時期クラブ内で肩身の狭い思いをしたとしても、外部の理解者やその後に入部して来る後輩はきっと味方となってくれますし、その味方が年を重ねるごとに増えていきます。そして、卒業後も、「良き伝統の出発点となった」との誇りを持ってクラブと関わっていくことができるでしょう。

―学生のときは自分自身やクラブのためにどのような努力をされていましたか。

ここまでの話はオリエンテーリング

界だけに当てはまる特別な話ではありません。上に、インカレを例として「明確な目標設定を」と訴えました。実際、「どうしてもオリエンテーリングがしたい」わけではなく、「何でも良いから全国大会に出られる競技をしたい」「日本一になりたい」という目標が先にあって、「インカレ上位」という実績に惹かれてオリエンテーリングのクラブに入る学生も、中にいます。

ところが、「インカレ上位」の実績がある大学のオリエンテーリングクラブに入ったものの、一定期間所属した後に「練習はまともにやらないし、部員は競技者としての魅力がない」と期待外れに感じて辞めてしまった学生もいる、という話を聞いたことがあります。

もしかしたらその学生は、「この程度でインカレ上位が狙えるなら、オリエンテーリングはまともなスポーツではない」と思ってしまったかもしれません。「活動実態」の重要性を思い知らされます。その学生には同情したいし、見限られたオリエンテーリングクラブには猛省を促したいところです。

オリエンテーリングに限らずスポーツのクラブが存続するためには、「練習」「合同トレーニング」という形の頻繁で濃密な活動が不可欠です。そしてその練習やトレーニングの中身は、オリエンテーリングが「ファンタスティックでエキサイティングなスポーツ」「貴重な学生時代の多くの部分を割いて没頭する価値があるアクティビティ」と考えてもらえるよう、面白味があるものとするべきです。面白味とは必ずしも「レクリエーション色の強さ」を意味しません。結局、どのようなスポーツ、ゲームも「本格的な環境」の中、「本式のルール」で行えるようになると最高に面白く感じられるものです。初期には動機付けのためになされたちょっとした環境やルールへのレクリエーション的なアレンジも、「本式」を身に付けた後には却って煩わしく、つまらないものに思えてきます。

クラブの「先輩」の方々には、未経験の新人に対して、一日でも早く本格的なオリエンテーリングを味わうに足る知識と能力を身に付けられるような働きかけをしていただくように、それ以前に自身がそうした知識や能力を備えておくように望みます。

成功しているクラブでは、最初の 1 ケ月で新人に対してのルールや基礎技術の指導、部員としての意識付けをしっかり行えています。そうした土台が構築されていてこそ、クラブのトップ選手の全国区での活躍や、クラブ全体の活気に結び付くのだと思います。

逆に、そのタイミングを逃すと、初歩の指導や意識付けはなかなかうまくいかない、とも言えます。もし、あるクラブで新人がうまく育たない、活動も停滞気味、という状況が見られるとしたら、悠長に構え過ぎているのかもしれません。例えば「最初はボチボチやって、春のインカレまでに一通り覚えれば良い」などと考えていると、すぐに時間は過ぎ去りますし、その間に新人は、すぐに他の活動や他の人間関係に心を奪われて行きます。

新人には、「熱烈な勧誘と歓迎を受ける」「頻繁に先輩とトレーニングをする」「練習会に参加して先輩の指導を受ける」「大会に先輩に連れられて参加する」「先輩のアドバイスを受けながら、練習会を運営する」「先輩たちと大会を運営して地図調査等も学ぶ」「練習やトレーニング以外の時間にも、先輩と過ごす（遊ぶ）」…といったことを最初の年にしっかりと経験してもらいましょう。そして 2 年目以降は「熱烈な勧誘と歓迎を新人に対して行う」「頻繁に後輩とトレーニングをする」…といった活動をする側に回ってもらいましょう。

―学生復活のために学連や JOA・都道府県協会への要望は

「学生復活」だけではなく「オリエンテーリング復活」という観点から回答します。

秋から冬にかけて全国 5 地区で開催されたＪＯＡ主催「普及方法研修会」（別ページにレポートが掲載されています）でも学生クラブだけでなく「地域クラブの活動の停滞」が話題となりました。活動が停滞しているクラブは、学生クラブに限らず地域クラブも「成功している学生クラブに学ぶ」姿勢が必要だ、との指摘も聞かれました。

新人（…と言っても、地域クラブの場合は年齢層も様々です）に、「熱烈な勧誘と歓迎を受ける」「頻繁に先輩とトレーニングをする」「練習会に参加して先輩の指導を受ける」「大会に先輩に連れられて参加する」「先輩のアドバイスを受けながら、練習会を運営する」「先輩たちと大会を運営して地図調査等も学ぶ」「練習やトレーニング以外の時間にも、先輩と過ごす（遊ぶ）」…といった経験を早い段階でしてもらう。こうした取り組みが（方法は学生とは異なるとしても）重要である点は、地域クラブも全く変わりません。

各都道府県協会やＪＯＡには、こうした取り組みを支えるような組織や制度を作る面での尽力をお願いしたいと思います。

例えば、活動が盛り上がっているいくつかの県では、全日本リレーを明確な目標として、県協会独自の技術講習会や練習会を開いている、という方策が採られています。それは一例であり、方法は他にもあるはずです。是非、活発な意見交換と現場での試行錯誤によって「オリエンテーリングに関わる面白さ」を多くの関係者に味わってもらえるような体制を整えていって欲しいと思います。

（松澤俊行）

あとがき

多くの学生クラブや上田泰正さん、安斎秀樹さん、松澤俊行さんらのご協力をいただきました。感謝申し上げます。

JOA でも普及に改めて取り組んでいますが、昭和 50 年ごろのように多くの人々（とりわけ子どもたち）に体験してもらう必要性を改めて感じました。しかし、大会への子どもの参加は皆無に近いほど少ない状態です。やはり、野外施設などで利用者自ら活動プログラムのひとつに取り込んでいただく必要があります。そのために我々は利用者のニーズに沿った効果や安全に運営する方法を示していかなければならないと思いました。

（小野盛光）